

I 特集 博士論文を振りかえって

博士論文を振り返って

相山女学園大学 専任講師

阿部 純一郎

2010年7月に社会学の博士号を取得しました。論文名は「帝国期日本のネーション形成と人種・民族研究の学知形成に関する移動論的研究：日本と台湾の博覧会事業および観光政策に注目して」とやや長いのですが、要約すれば、明治期以降の人類学系フィールドワークと博覧会・観光政策を切り口にして、台湾に対する日本の植民地支配の歴史を辿りなおした論文です。

観光・博覧会・フィールドワークに注目したのは、それが当時の日本人にとって、植民地の文化や民族に直接触れることのできる、最も重要な出会いの場だったからです。この時期には、調査や観光目的で植民地を旅行する機会が開かれたばかりではなく、ますます多くの日本人が、国内に居ながらにして、「内地観光団」や博覧会の展示対象として日本を訪れた「原住民」と出会いました。私の博士論文は、これらの出会いを可能にした日本帝国内のさまざまな移動者の実態と、それを取り巻く学知と政策の歴史を描いたものです。

思い返せば、博士論文につながる原稿を書いたのは2007年の夏でした。この頃はもうODですから、ずいぶん悠長な話です。それまでは修士論文の延長で、英国のレイシズム・移民・シティズンシップ問題を研究していました。しかし当時書いた論文は、最終的な論文にはほとんど残っていません。というのも、この頃を境にして、私の関心は戦前日本の人類学史、特に植民地で実施されたフィールド調査の歴史にシフトしたからです。

これまでのテーマを離れることに躊躇はありませんでした。私自身、このまま続けるかぎり、資料的な裏付けに限界があると強く感じていましたし、さらに背中を押されたのは、はじめて戦前の人類学調査について発表した後、ある先生から「君の研究はこれまでセカンドリーだった。しかし今回はその点では良い」と評価をいただいたことでした。これを機に、私は自分の研究を土台から見直すようになりました（ただし当時の発表は、その後納得ゆく論文にまとめられず、結局、博士論文では削りましたが）。

なぜこのテーマに行き着いたのか。これはもう“出会った”としか言いようがありません。たぶん一方の学説史への関心と、他方の人種・民族問題への関心が結びついたのでしょうが、その他に資料面での偶然もあります。幸運にも、名古屋大学の図書館には戦前の人類学・民族学・民俗学系の学術雑誌が欠本なく所蔵されていました。これで先行研究が扱っている文献はほぼカバーできましたし、先行研究が一次資料のどの部分を切り取っているか（切り捨てているか）が実感としてよく理解できました。また台湾に焦点が絞られていたのも、実をいうと、台湾の植民地政策に関する一次資料が名古屋大学をふくむ近郊の諸大学に豊富に所蔵されていたことが大きな理由です。言説分析の範囲が資料の入手しやすさという外的要因に左右されるのは、方法論的には「邪道」でしょうが、一方で面白い

発見もありました。それは、資料がつねに手元にあったため、自然とより網羅的な読み方をするようになり、その結果、同時代の諸現象・諸言説間の横のつながりが発見できたことです。おそらく資料がもっと遠方にあつたら、そのような読みは時間的・金銭的な考慮が働いてできなかつたでしょう。また博士論文も、人類学調査と観光・博覧会政策の同時代的な連関を解明するという方向ではなく、植民地のフィールド調査史を時系列的に追うという、よりリニアな構造になっていたと思います（実際、当時の資料をみると、2008年9月の博論審査セミナーはまだ後者の形をとっており、翌2009年5月のセミナーでも観光・博覧会政策の章は「補論」にとどまっています。その後半年間で、この「補論」は人類学調査とならぶ博士論文の柱にまで成長しました）。

行き当たりばつたりの執筆過程で、これから博士論文を書こうとしている後輩の皆さんには参考にならないかもしれません。ただ自分の経験から1つ言えることは、もし執筆中に思い悩んだら、一度ゼロから論文の構造全体を作り直した方がよい、ということです。私の場合、これまでの論文をすべて盛り込もうなどというケチな考えは捨て、新たに書き下ろすと決めたことで、結果的にはスムーズに論文完成に至ることができました。確かに遠回りはしましたが、今でもあのときの決断は間違っていなかったと思っています。

今回改めて振り返ってみると、満期退学までに何とか博士論文を提出できたことは自分でも奇跡的だったと思います。大学二年の頃からお世話になっている恩師の西原和久先生には大変ご迷惑をおかけしました。先生自身ご多忙であったにもかかわらず、いつも原稿の細部に至るまで懇切丁寧に指導していただきました。自分自身が学生の論文を指導する立場になってみて、今さらながら自分の無計画性を恥じる思いです。また博士論文の審査を務めていただいた環境法政論講座の川田稔先生ならびに社会学講座の先生方には、自分でも見落としていた新たな切り口・世界観について貴重なコメントをいただきました。これにきちんと答えていくことが、現在でも私に課せられた大きな宿題になっています。最後に、私の博士論文は何よりも当時の社会学講座を取り巻いていた知的環境の産物です。所属する西原ゼミには、学説史・社会理論をグローバリゼーションや差別問題といかにリンクさせるかという困難な課題に取り組んでいる先輩方が大勢いましたし、同様の問題関心をもつ学内外の若手研究者が活発に出入りしていました。また専門を異にする他の院生と多くの勉強会を開くなかで、自分の研究領域の狭さを相対化することもできました。このような領域の壁を越えた自由な議論・交流がなければ、観光・博覧会・フィールドワークをつなぐという構想は生まれなかつたと思います。若手研究者の就職状況がますます不安定化するなかで「甘い」と言われるかもしれませんが、私は名古屋大学社会学講座のこのような開かれた伝統が今後も続いていくことを切に願っています。